

令和 4 年 9 月 2 日現在

機関番号：34448

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K02487

研究課題名(和文) 医療専門職との連携によるインクルーシブ教育実践カリキュラム構想に関する研究

研究課題名(英文) Inclusive education practice curriculum plan in cooperation with medical professionals

研究代表者

阿部 秀高 (abe, hidetaka)

森ノ宮医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：80617572

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：医教連携による発達障害児の教育的ニーズをより詳しく見極め、学びを深める実践やカリキュラム構築に取り組んだ。本研究を通して特別支援学級に在籍する発達障害の子どもたちの学びをより確かにする医療・教育両面からの評価を行い、学習、活動の成果や評価などをICTを活用し、可視化・蓄積することによって、インクルーシブ教育のカリキュラムが構想された。カリキュラムの運用においては、発達障害の子どもたちが真の自立の実現にむけて、学校だけでなく、あらゆる生活場面でより自分らしさを発揮して豊かな日常生活を送るために切れ目のない教育・支援によって、身につけた力の自覚化・定着化を図る教育システムの必要性が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究における作業療法の視点による評価表や、理学療法の視点による体幹トレーニングや感覚統合訓練などを教育方法に取り入れた。この結果、子どもたちひとりひとりを大切にして、新しい学習指導要領が求める未来社会を生き抜く資質・能力を育てていくためには、これまで学校教育に蓄積された知見と医療をはじめとする様々な領域の知見を取り入れることの重要性が確認できた。そのために学校教育が積極的に他の分野からの知見を受け入れる体制を確立し、教師が他の分野の知見を学ぶ機会を増やし、教師が視野を広げ、学んだことを自らの教育実践に活かしていこうとする意欲や熱意をこれからの教師に醸成していく必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：Through this research, we worked on the practice and curriculum construction to deepen learning by identifying the educational needs of children with developmental disabilities through medical-teaching collaboration. A curriculum for inclusive education was conceived by evaluating from both aspects of education and visualizing and accumulating learning, activity results and evaluations using ICT. In the operation of the curriculum, there is a continuous education for children with developmental disabilities to realize their true independence and to show their own personality and lead a rich daily life not only at school but also in every life situation. With the support, the need for an education system to raise awareness and establish the acquired power became clear.

研究分野：教育学

キーワード：インクルーシブ教育 カリキュラムマネジメント 教師教育

1. 研究開始当初の背景

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課によって出された平成 29 年度特別支援教育資料 (平成 30 年 6 月 (2018)) によると特別支援学級に属する子どもたちの増加が顕著であり、そのことは、ここ数年の小・中学校において、様々な場面での適応の難しさが現れる子どもたちが増加傾向を示している。いわゆる発達障害の子どもたちである。

これらの子どもたちの多くは、小学校段階では、特に多動傾向や体幹保持や、言葉や文字の習得のなど、それぞれの教育的ニーズに合わせた支援を受けるため特別支援学級に在籍し、通常の学級の行き来によって学校生活を送っている。しかしながら、発達障害の子どもの中には中学校では通常の学級に転籍するというケースも見られる。これは成長により特別支援学級に入る必要がなくなったという場合もあるが、高校進学などを見据えた保護者の希望によるものもある。こうした現状を鑑みると、発達障害の子どもたちが中学校においてよりよい学校生活を送るために、さらに将来、社会で自分らしく生活していくために、小学校の特別支援学級や通常の学級での身体的・認知的な支援をより専門的に行い、より確かな成長を実現していくことが重要となる。そのために専門職との連携を図り、得られた支援、指導に関する知見やスキルを学校で共有される必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、森ノ宮医療大学の理学療法学科、作業療法学科に在籍する特別支援教育に関連がある研究をしている理学療法士、作業療法士の研究者とチームを組み、特別支援学級在籍の発達障害の子どもたちのより確かな成長を促すカリキュラムづくりとそれに向けての教員への研修による資質・能力の向上を目指す。さらに、教員研修を通して学んだ専門知識を通常の学級にも在籍している全ての発達障害の子どもたちへのよりよい指導・支援につなげていくことが最終的な目指すべき到達点である。そして、そうした取り組みをまとめ、学校現場で医療の専門的な知見やスキルを活用したより信頼性の高い「チーム学校」としてのインクルーシブ教育実践カリキュラムの創造によって、全国的に増加傾向である義務教育段階での特別支援教育の指針の一つを提案していく。

そのために、本研究の目的は、特別支援学級に在籍する発達障害の子どもたちへの指導の工夫を医療専門職や学校教育の研究者と教員が協力して行うカリキュラム構想、それに基づく実践を行うためのより良いカリキュラム・マネジメントの在り方を探っていくことにある。つまり、子どもたちのよりよい成長の実現とそのために必要な教員資質・能力の向上の一挙両得を目指すのである。そのためにまずは、研究協力校である伊丹市立天神川小学校の特別支援学級から通常の学級に本研究に基づく理論や実践を広げ、その考え方やノウハウを通常の学級においても活用できるように学校全体の学習過程の大きな枠組みとして構想し、実践をした。ここで言う大きな枠組みとは、教科・領域のカリキュラムとは異なり、学校教育目標に基づいて設定された伊丹市立天神川小学校の教育研究目標の達成のためのカリキュラム構想を指した。これは、一般的な学校の教員研修として行われる教育研究活動にあたるものであり、本研究の構想は、天神川小学校の教員研修の全体構想とも重なるものとなる。従って、本研究は、特別支援教育の充実が求められる今、一層望まれる学校全体のカリキュラム・マネジメントの一例を示すことを目指し、「医療専門職との連携によるインクルーシブ教育実践カリキュラム」として発信することによって多くの学校の学校研究の構想の一つのモデルとすることもねらった。

3. 研究の方法

「医療専門職との連携によるインクルーシブ教育実践カリキュラム」の構想のための方法としては、伊丹市立天神川小学校と教員研修として行ってきた研究のテーマである「伝え合い、学び合う子供を育てる全員参加の授業づくり」の理念に基づき、3年間にわたる共同研究を行う。学校教育の研究者である研究代表者のカリキュラム・マネジメントのもと、カリキュラム構想の柱として次の3つの取り組みを行った。

年度初めに行う特別支援学級の自立活動合同学習の公開研究授業によって、学習支援(授業づくりの工夫、体幹・視覚トレーニングなど)を通常の学級を担任、担当する教員に広め、その工夫を通常の学級にも活用していくことを促す。

医療専門職(理学療法士・作業療法士)による、体幹、視覚トレーニングに関する教員対象のスキルアップ研修会、保護者向け講習会を開催する。

体幹・視覚トレーニングをモジュールで授業の一部に日常的に組み込んで取り組んでいくことを特別支援学級からはじめ、必要に応じて通常の学級でも取り組んでいく。

具体的な手立てとしてまず一つ目の柱は「教員研修」における取り組みである。これまで伊丹市立天神川小学校では、教員研修の授業づくりアドバイザーとして、教育方法の研究者である研究代表者を招聘し、学校研究として全ての学級において授業や学級における様々な活動で「全員

参加を促す手立て」を意識して学習，その他の指導に関する研究を行い，年間5回の全体研修会を軸に全教員が意識して取り組んだ。特別支援学級をはじめとして，一人一授業公開を行う中で，全ての教員が作成する学習指導案の中にそれを位置づけて，全ての子どもに授業や各活動による確かな資質・能力の育成，成長実感の形成を目指した取り組みを行った。

また，1つ目の柱である全教員の資質・能力の向上に関する取り組みと並行して行う2つ目の柱としては，「特別支援学級と通常の学級のコラボレーション」による取り組みである。これまで特別支援学級において実践されてきた自立活動の合同学習である「集合タイム」において中心に行われている個別の教育ニーズに合わせた合理的配慮を実現した教育方法を洗い出し，通常の学級においてもその知見を活用していくために，教員同士が情報交換を行うことである。特別支援学級では，医療専門職との連携し，授業において他者との伝え合いや学び合いによる成長，自立のために必要な個に応じたそれぞれのニーズを研究領域の違う研究者がそれぞれの見地から見極め，教員と情報交換しながら，具体的なアプローチのアイデアを構想，計画していく。その授業における児童の伝え合いを記録，集積し，それぞれへの手立て，アプローチの有効性を検証しながら，一人ひとりに対するよりよい指導・支援のあり方を探っていくのである。こうした取り組みを，今後三年間に渡って授業やその他活動の観察・記録を継続的に行い，取り組みによる成果や課題をもとにカリキュラム改善を繰り返しながら，特別支援学級の児童に関しては，個別の指導計画も改善していった。それら特別支援学級における取り組みを広げ，通常の学級の子どもたちに活かすために全ての教員が学んでいくために本研究をコーディネート担当である研究代表者が関わり，全ての教室の授業や活動を客観的に観察，分析し，学習効率の向上，子どもたちの学びの姿勢の向上，対話の活性化のために繰り返しフィードバックしていったのである。研究代表者がこれまで特別支援教育の研究の中で述べてきた「全ての子ども一人ひとりが特別支援される存在である」，「特別支援教育に学ぶ普通教育」の考え方をもち，特別支援学級の取り組みに学ぶ通常の学級の指導，授業づくりの在り方を具体的にしていけることがこの2つ目の柱である。

さらに，3つ目の柱としては，こうした研究・実践を通して，「特別支援教育の啓発，発信」していくことである。これは，特別支援学級の子どもたちの中学校進学以降も視野に入れ，小学校と保護者，中学校，さらには，地域が，児童の療育や進路選択，自立を目指した取り組みの方針などの計画を協力して行っていくためによりよい契機となることを目指していくためのものである。まずは，教員，保護者に対する特別支援教育に対する啓発活動の活性化である。本研究では，これまで述べてきたとおり，特別支援学級を学校教育研究の中核または起点に据えることによって，特別支援学級の子どもたちに行ってきた医療専門職による身体的，認知的トレーニングやセラピーなどを学校全体，地域に広く知らしめるために，学校開放などを通して講習会などを積極的に開催していく。この取り組みを通して，地域における特別支援教育に関する認知度を上げていくとともに，文部科学省が示しているインクルーシブ教育システムの構築による共生社会の実現への一つの足がかりとなっていくことをねらった。

4. 研究成果

本研究成果は，3つの柱に基づき，医療専門職との連携と教育研究者との連携を組み合わせたことによるものが大きい。医療専門職との連携としては，作業療法士の視点から提示された，作業の評価表による取り組みである。作業療法に基づく評価表に示された各視点に基づいて子どもたち一人ひとりの作業状況を焦点化して観察していくことによって，より具体的に個々の課題の状況を把握し，それを解決していくための実践における手立て，計画が立案しやすいという実感があつた。さらに作業療法士からの指導による取り組みとしてSST(ソーシャルスキルトレーニング)カードを活用し今自分が直面している問題について向き合い，正しい対応ができるように工夫することによって，よりよい行動を生み出し承認欲求が満たされ，個々の活動意欲向上につながった。

次に，理学療法士からのアドバイスで取り組んでいるのは，体幹トレーニングである。これは，朝の会や合同自立活動の授業の始めの5分程度を利用して，継続的に体幹保持の体操や自分自身にかかっている重力を感じる体操など，地面を押す感覚，自分の身体を支える感覚など，感覚統合訓練として行った結果，鉛筆を持つ姿勢や体感を支える力の向上が実感できた。

そして，最後は教育研究者との連携による授業実践の向上である。教育研究者とは，授業づくり，教育方法を専門に研究している研究者であり，天神川小学校の学校研究に教員研修アドバイザーとして5年にわたって関わっている研究代表者である。役割としては，本研究の目的である医療専門職との連携によるインクルーシブ教育実践カリキュラム構想における全体コーディネートを担った。教員と医療専門職をつなぎ，そこからの知見をカリキュラムに取り入れるために，実際の授業において活用できる教育方法に落とし込めるように教員と共に議論を重ね，授業を作っていた。本研究において，医療専門職との連携によって得られた知見を取り入れた実践を具現化する上で教育方法としてメインに位置づけたのは，合同自立活動における個々の発達段階や特性に応じたペア，グループの組織による実践と個別学習で語彙を増やし，小集団の自立活動ではその語彙を場に応じて使う経験を繰り返し積み重ねていく「ことばのたからもの」の実践の2つである。

個々の発達段階や特性に応じたペア，グループの組織

グループ構成では，45名を3つのグループに分け，上の学年と下の学年がペアとなり学習を

進めている。そのグループ分けの教育的意図は以下のとおりである。

- ・5, 6年生の発達障害の子どもたちと1, 2年生の特に支援を要する子どもたちを組み合わせることによって, 5, 6年生の子どもたちにリーダー性や養護性を発揮させる。
- ・中学年を中心に障害の程度や支援の仕方において競い合いができる集団をつくり, 競争の中で自己のコントロールや他者の頑張りなどを捉えられるようにする。

以上のような明確な役割分担をして, その役割を果たすことにより, 上の学年の養護性や主体的なコミュニケーションが引き出せるように工夫した。伝え合いの場面では, 互いの発表を聴こうとする姿勢も見られるようになり, 互いの良さを認められるようにもなった。これによって上の学年が下の学年に声をかける様子が見られ, 上の学年の児童が学習のモデルを示す場を作ることで, 自分の出番を楽しみにしている児童も増えた。

「ことばのたからばこ」の実践

作業療法士の評価表の心理面, 認知/遂行的側面の項目について教師が意識すると共に, 子どもたちがそうした行動や気持ちを自覚することによって, 自分の成長をより確かに実感できるようにすることをねらった取り組みである。

授業や日常生活において子どもたちから引き出した言葉を整理し, カードや掲示物にしていつも自分の使った言葉を意識させることに取り組んだ。

特別支援学級に在籍する子どもたちの多くは, 感情のコントロールや衝動性を抑えることなどに, 特に困難さを持っている。そこで, このように様々な状況における感情や様子を表す抽象概念を常に言葉と結びつけることを意識するトレーニングをすることによって, 少しずつではあるが, 立ち止まって考えることができるようになってきた。カードにある言葉と自分の書いた文字に目を動かしながら, 自分の文字を書くという活動を振り返ることは, 作業療法的な視点として取り入れた。また, このカードの中にある言葉を見ながら文字を書くことによって, 姿勢を意識することもできる子どもの姿も見られた。これは, カードの中の言葉を見るという意識が, これまで文字を書く際には意識していなかった姿勢を正すという意識を喚起したのではないかと推察できる。実際にこれまで文字を書くことだけに集中すると, 周りが見えなくなって, 一つ一つの文字を書くことよりも, マスを埋めて, 行を完成させることに気がいきがちになってしまっていた。ところが, カードにある言葉を見ることを意識することによって, 一つ一つ書いた文字を比べて, 「前よりうまく書けた」などの比較を行ったり, 書く姿勢に注意してみたりなど, これまで意識の上に登らせることができていないことにも少し立ち止まって自ら留意するようになった。

さらに, こうした「ことばのたからばこ」を常に意識させるようにするための取り組みとして, 特別支援学級での学年を越えて行う合同自立活動の授業の中で, グループで相談したり, 仲間の学びを評価したりする場面で, より良く伝え合いを行うためのツールとして「ことばのたからばこ」を活用させた。グループで相談したことを他のグループに伝えるときに, どの言葉を使って伝えたらよりわかりやすいかと言うことを「ことばのたからばこ」の掲示の前で相談する場面を作った。さらに, 授業最後の振り返りの場面で, 自分の学習成果を「ことばのたからばこ」にある言葉をつかって, 発表する場を設けた。こうした場の設定の繰り返しによって, 自分の学習成果が的確に伝えることができた実感を持つことができる。それによって, 「ことばのたからばこ」の活用への主体性はさらに高まっていくのである。また, 聞き手も「ことばのたからばこ」を活用して, 的確に評価してくれるので, 自身の学習成果の価値への自覚化はさらに高まっていく。そして, 「ことばのたからばこ」を意識して聴いている子どもたちも評価者として質が高まるという効果も確認できた。

こうした振り返りをはじめとした発表場面において, 「ことばのたからばこ」は, 子どもたちの相互評価の質を高め, 自らのへの自己評価の質を高めることに効果を発揮している。これによって, 今後も特別支援学級の子どもたちに最も必要な自己肯定感の育成を促すことができた。

以上が, 教育研究者との連携により, 医療専門職の知見を活用した授業づくり, 学びの質向上を目指した学習方法による取り組みとその成果である。さらに, その成果として実践例からその成果と課題を分析した。

医療専門職との連携によるインクルーシブ教育実践カリキュラムに位置づけた実践例

これまで述べてきたとおり, 伊丹市立天神川小学校を研究フィールドに医療専門職と教育研究者による研究への助言に基づいて研究をすすめ, 現時点で様々な成果がみられた。

さらにそうした成果を具体的に見るために, 特別支援学級の全体公開授業を実践例として紹介する。本稿のテーマである医療専門職との連携による様々な知見を取り入れ, 教育研究者の助言の元, 学年を越えて様々な教育的ニーズを持った45名の子どもたちを一人ひとりの適性が発揮できるようにグループの分け方を工夫した。設定した単元は「目に見えない気持ちを伝えよう～ケーキの贈り物を通して～」である。本単元の目的は, 普段から, 相手に思い(目には見えない気持ち)を伝える際にうまく伝えることができず, トラブルになってしまうことが多く, そうした経験からコミュニケーションに対して消極的になることが多い子どもたちに, 言葉だけでなく, 物や表情・身振りを使って, 目に見える形にして伝えることが大切だということに気づかせることである。

まず単元の導入においては, 本単元で使わせたい言葉を使ったコミュニケーションゲームで学習の準備をする。単元のゴールである目に見えない気持ちを自分なりに伝えるために, わかりやすい表情や大きな身振りで表現する方法を知ることによって学習に見通しを持たせたためである。そ

して、本単元のめあてである「目に見えない気持ちを伝えよう」を児童に提示し、自分の気持ちを言葉で伝えるためにはどうすればよいかを考える機会を設定した。本授業をはじめとして、これまで天神川小学校特別支援学級のカリキュラムにおいては、毎回体幹体操、音読からはじまり、児童の作品や発言を元に前時の振り返りを行っている。また、課題設定の場面では、上の学年の児童が前に出て課題を提示したり、モデルを示したりして全員でめあての共有ができるように工夫している。ペアでの活動の場面では、安心して学習が進められるように、作品や考えたことを見合う、聴き合う時間を取り入れている。さらに、活動を進める中でペアでの良いやりとり（会話）が聞こえてくると、みんなを注目させペアのやりとり（会話）を再現させ、良いモデルを共有し評価する。最後の振り返りでは、観点として「モデル」「やりとり」「気づき」の視点に分類しながらカード化し児童の学びを評価した。このカードが増えていくことによって、児童に自らの表現が評価されたことを実感させ、さらなる表現を引き出すことにつながった。このように、児童の行動や発言を評価することを繰り返すことによって、児童の主体的な学びを実現することができた。

以上がこれまで医療専門職との連携によるインクルーシブ教育実践カリキュラムを構想してきた中で、その特徴が現れた代表的な実践の概要である。作業療法士の助言によって取り入れた認知/遂行的側面と心理面における子どもたち一人ひとりへの評価の視点や、教育研究者からの助言により取り組んでいる合同自立学習において子どもの発達段階に応じて教育的ねらいを持って行うペア、グループ編成の工夫、並びに、「ことばのたからばこ」を活かした実践を通して、子どもたちは、衝動性を抑えて立ち止まって考えたり、より内容を深く吟味したりすることができるようになった。さらに、それぞれの教育課題に向き合い、少しずつ自らの成長を実感することによって、自己肯定感を高めつつある。特に、「ことばのたからばこ」の取り組みは、授業公開研究によって他の教師によって通常の学級でも応用され、実践され、各教科領域の学習において、既習事項として主に振り返り場面において相互評価や自己評価、教師評価を行う際に活用されるとともに、子どもたちの日常生活の行動・判断の規準として活用されている。インクルーシブ教育実践カリキュラムとしては、特別支援学級の子どもたちだけでなく、全ての子どもたちの教育にも活用できることが望むべき姿であるため、こうした通常の学級での活用も今後広げていく必要がある。

以上が、これまで述べてきた試作段階でのカリキュラムに基づいた実践から見てきた現時点での医療専門職との連携によるインクルーシブ教育実践カリキュラム構想に基づく教育実践の一番の成果とこれからの課題である。

本研究のテーマである医療専門職との連携によるインクルーシブ教育実践カリキュラムの構想と、そのカリキュラムの効果を検証するには、最低でも1年間の構想とその検証のために数年間の検証の期間が必要となる。コロナ禍で中断を余儀なくされた本研究は、今なお現在進行中である。現時点で医療専門職や教育研究者の研究への参画、そしてそこからのアドバイスや助言を通して、子どもたちに様々な取り組みを行ってきた。その取り組みが具体化され、新たなアイデアをもとにした実践が重ねられていくごとに、作業療法の視点、理学療法での視点における成長が、学習や日常生活における心情面・行動面において、大きな効果をもたらしていることを、教師や保護者はもちろん、子どもたち自身も実感することができている。

教育にも確かなエビデンスや明確な成果が求められる時代に、これまで積み上げられてきた医療的なエビデンスに基づいた知見を教育に持ち込むことは、様々な教育的ニーズが求められるこれからの学校においては、ますます大変重要になってくるに違いない。今回の研究における作業療法の視点による評価表や、理学療法の視点による体幹トレーニングや感覚統合訓練などを教育方法に取り入れ、教育実践として学校現場で教師が目の前の子どもたちに即して工夫していくことによって、教育により確かな効果、成果が見られるようになってくることは、本研究において実感できている。学校教育に多くを求めすぎる傾向については問題を感じるが、少子化の現在、子どもたちひとりを大切に、新しい学習指導要領が求める未来社会を生き抜く資質・能力を育てていくためには、これまで学校教育に蓄積された知見と医療をはじめとする様々な領域の知見を取り入れることが一つの突破口となることを確信している。そのためにはまず、学校教育が積極的に他の分野からの知見を受け入れる体制づくりが重要になってくる。例えば教員免許更新講習などで行われている教師が他の分野の知見を学ぶ機会をもっと増やしていくことによって、教師の視野を広げ、学んだことを自らの教育実践に活かしていこうとする意欲や熱意をこれからの教師に醸成していかなければならない。そうした教師教育や研修との連動も課題となるだろう。これからはこうした連携や連動、つながりを重視していくことが、子どもたちの多様な教育ニーズに応える学校づくりの第一歩になるのではないだろうか。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 阿部秀高	4. 巻 7
2. 論文標題 医療専門職との連携によるインクルーシブ教育実践カリキュラムに関する研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人間教育学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 阿部秀高
2. 発表標題 医療専門職との連携によるインクルーシブ教育実践カリキュラムの創造
3. 学会等名 日本人間教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阿部秀高
2. 発表標題 医療専門職との連携によるインクルーシブ教育実践カリキュラムの創造
3. 学会等名 日本人間教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	橋本 弘子 (hashimoto hiroko) (30465661)	森ノ宮医療大学・保健医療学部・教授 (34448)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	中根 征也 (nakane seiya) (70742419)	森ノ宮医療大学・保健医療学部・教授 (34448)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関